

独りにならないで

丸山 勉

[聖書] ヨハネによる福音書 4章 16～30節

イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

[序] 教会の臨時総会の日にあたり

ヨハネによる福音書4章は、その殆どが、イエス・キリストと、一般に「サマリアの女」と呼ばれる女性の出会いの物語の記事になっています。ヨハネによる福音書だけが書き残してくれている、それこそ心の中に清水が流れ込んでくるような美しい物語だと思えます。この物語をお好きな人は少なくないと思えます。私もこの物語は、読むたびに新しい発見をさせられます。私は、今回は、ここを読んで、「教会」というもののありようを特に考えさせられました。

「教会」とは何でしょうか？ 色々な言い方が出来ますが、**教会とは、人を分け隔てしないしな信仰共同体、或いは礼拝共同体**と言えるのではないのでしょうか。そして、その中心におられる存在は、人間ではありません。**神様であり、イエス・キリスト**です。ですから、いわゆる好きな者同士の集まりやサロン、同好会のようなもの

とは全く違います。もし教会がそのようなものであれば、排除される人も出てきてしまうでしょうし、また、ある人は入れないような雰囲気もどこか漂っているかもしれない。けれども、**教会には、「排除の論理」があってははいけません。**そうであれば、もはや教会ではないでしょう。教会とは、**人を偏り見ないキリストの愛によって、例外なく、私もあの人も、またあの人も愛されているのだ、という、その事実**を土台とする共同体です。

このサマリアの女の物語は、イエス様に捉えられたこの一人の女性の物語であると同時に、途中からは、**礼拝**という、私たちが今毎週行っている、**独りではなく一緒に神様を讚美し、祈る**ということの意味をも教えてくれている物語だと思います。今日、教会の臨時総会の日にあたって、この聖書の箇所を味わうことが出来るのは、私は、不思議な神様の導きを感じています。

[1] 私たちは皆「失われた者」

さて、イエス様と私たちが出会うということは、一体どういうことなのでしょう。先ほどこの礼拝の「招きの聖句」で読んで頂いた御言葉が、そのことを良く示してくれていると思います。こういう言葉です。

「人の子(イエス)は、失われた者を捜して救うために来たのである」(ルカ 19:10)。
—私たちは皆、神様の目から見ると、“失われた者”なのです。けれども、いや、だからこそ、と言った方がいいかもしれませんが、神様はその「失われた」存在を、自ら捜し出し、ご自分の許に引き戻そうとするのです。その方法は、「**イエス・キリスト**」という人間となった「**神の言葉**」からの「語りかけ」、「近づき」をもってです。

このヨハネ福音書4章の初めの方には、このサマリアの女と主イエスが出会った背景に、何としてでもこの「失われた存在」である女性に直接会って、神様の招きを伝えたい、そういうイエス様の思いがあったことが見て取れます。それは4:4の言葉です。「**サマリアを通らねばならなかった**」。——この言葉は、“このことは絶対なさなければならない”という意味が込められた“**神的必然**”とも言われる、**イエス様の決意**が込められた言葉です。イエス様はこの女性めがけてサマリアまで歩いてきたと言えます。しかも推測すると、間違いなくかなり朝早くからです！

私たちも同様ではないでしょうか。私たちがイエス様と出会ったのは、“偶然”なのでも、“たまたま”なのでありません。神様の熱い思いあってこそ、私たちとイエス様との出会いなのだと思います。イエス様は「あなたと出会いたいのだ！」という**そのご意志がまず先行しているのです！**これはあの徴税人ザアカイとイエス様との出会いでも全く同じです。イエス様はザアカイに言いました。「**今日、あなたの家に泊まることにしている**」(ルカ 19:5。口語訳)と。まず、イエス様が近づいてきて

下さっているのです。これは大きな慰めであり、聖書の真実だと思います。

[2] サマリアの女の孤独の中に

このサマリアの女性は真昼に、旧約聖書以来の、**ヤコブの井戸**と呼ばれる井戸まで水を汲みに来ました。井戸というのは正にオアシス、そこにやってくる女性たちの交わりの場でもあったに違いありません。そこで世間話をする。家族のことなどにも話題は及ぶ。けれどもこのサマリアの女性は、その交わりを避けていたのだと思います。彼女は特に女性たちの交わりに入りたくなかったのだと思うのです。なぜなら、この16節以下で分かりますが、この女性は、もう5回も結婚し、また離婚しているのです。

こういう女性を**私たちはどう思う**でしょうか。何と不運なことが続く人なのかと思うこともあれば、身持ちが悪い女とか、男にだまされやすいダメな女だとか、噂話の恰好の材料にはなるけれども、どちらかと言うと**心の中でさばいたり、軽蔑したりすることは**ないでしょうか？ しかも今また違う男と暮しているらしい、困った人だわと。そのような噂話は彼女の耳にも届いていたに違いありません。…そして私は、誰よりもこの女性自身が、**どこか呪われた女、人にも神様にも捨てられる運命にある女**として自分のことを見ていたのではないかと思います。ここにこのサマリアの女の**深い孤独と悲しみ**があるのではないのでしょうか。人が集まって来ない、暑い真昼を狙って水汲みに来るという行為、それだけが彼女にとって、喉だけでなく、外に出、ほんのひと時、渇きが癒される時であったのかも知れません。

しかし、この日だけは違っていました。誰もいないと思っていた井戸の傍らに男の人がいて、声を掛けられたのです。朝早くからガリラヤから歩いて来、疲れているこの男の人は「**水を飲ませて欲しい**」とこの女性に頼んだのです。これはポーズではないと思います。イエス様は本当に渇きを覚えられ、「**渇く人**」として、この女性に接しました。この女性も「**渇く人**」であったから、**その立場に身を置かれた**のです。しかもさらに低く、「**私に水を提供して下さい**」と頼んでいるのです。

そもそもユダヤ人の男性がサマリア人の女性に声をかけることなど殆ど無いことだったようです。**サマリア人は、もともとはユダヤ人と同じ民族**であったのですが、ユダヤの北王国滅亡後は、占領政策から首都であったサマリアに他国民が入り込み、混血の民族となり、また偶像礼拝なども起こるようになって、ユダヤ人からは蔑まれていたのです。元は同じ主を信じていた者たちですが、**礼拝の場所**もユダヤは**エルサレム**で、サマリア人は排除され、独自に**ゲリジム山**でと、互いに反発し合っていたのです。その**反発、排除の論理**が庶民のレベルにも浸透していました。元は同じ民族であったのに悲しいことです。しかし、イエス様は、このサマリアの女性に声

をお掛けになることで、そんな垣根を一気に突破してしまいました！

[3] 「わたしを信じなさい」との招き

そして16節以下を見ますと、イエス様はこのサマリアの女がこれまで生きてきた歩みを全てご存知でした。それはこの女の人の孤独と悲しみを全て知っておられる、ということです。この女性に、イエス様は、井戸から汲む水ではなく、「生きた水」をあなたに与えるという話を14節でされ、今度は「礼拝」の場所についての話をされるのです。これがこの対話の頂点とも言えると思います。19節からお読みします。

「女は言った。『主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。』
イエスは言われた。『婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。』—そして23節ではこのように言っています。

「『まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。』」

今度は女性の方から「礼拝」について話題にしたのです。彼女の心の渇きは、まことの神様への渴望であったということが分かりますね。それをこの女性は深い所で求めていた。けれどもきっと彼女はゲリジム山での礼拝には行っていなかったと思います。人の集まるどころ、交わる所には行けなかった。神様を求めていても、人には会いたくない。そういう時期があるものです。彼女は自分の心の部屋に閉じこもっていたのです。その直中にイエス様の招きの声が響いてきました。

「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。」——「わたしが来たからには、礼拝はもう場所の問題ではないのだよ、ただわたしを信じれば良いのだよ」と。そして、それは「今、その時が訪れたのだ。場所や形式が大事なものではない、神様の霊に導かれ、悔い改めの真実の心をもって礼拝する、そんな神様との生きた交わりの礼拝の時代がやってきているのだよ」とイエス様は、まずこの共同体から排除されたような女性に向かって、礼拝の真理を語られたのです。

そして**決定的な宣言**をイエス様はなさいました。女が「やがてキリストと呼ばれるメシアが来ることは知っています」と言うと、「それは、このわたしである」と言われたのです。これは私たち一人ひとりの奥底に向かって響く大きな声です！「あなたはもうメシアを捜し求めて彷徨わなくてよいのだ。わたしこそあなたの救い主だ」という宣言です。これは旧約聖書の、あのモーセに神様が顕現された時の「わたしはある、というものだ(有りて有るもの)」に匹敵する神様の自己表現であり、私たちの命

の土台はここにあるのだ、という力ある宣言です。

しかも、ここは**ヤコブの井戸**です。ユダヤ人もサマリヤ人も**共通の父祖**であるヤコブに由来する井戸です。何と象徴的でしょうか。イエス様が来られたことによって、これまでの歴史の悲しみも、また差別も乗り越えられているのです！それは、人間が皆神様の前に「**失われた存在**」であることを良くご存知の上で、その**人間の罪を贖うために**イエス様は来られた、ということを既に語っているのではないのでしょうか？

【結】 独りぼっちではなく「共に」

この宣言をイエス様から聞いたサマリヤの女はどうなったことでしょうか？ こうあります。—「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。」

すごいことです。それまでの**孤独な心が一変して、自分ばかりを見つめていた思いなど吹き飛んで**、自分の噂話に花を咲かせていたような町の人々の中に、息弾ませて入っていったのです。それは彼女がいつも汲まなければなくなってしまいう水ではなく、**彼女に中に与えられる水、神様が下さる、流れるような命の水、聖霊を頂いたから**です。「わたしはこの方に知られている。愛されている。赦されている。さあ、あなたもこの方の言葉を聴いてほしい、出会って欲しい」と、恐らく彼女はヨハネ福音書が語る最初のユダヤ人以外の伝道者になったのです。39節には、この女性の言葉をきっかけに、多くのサマリヤ人たちがイエスを信じた、とあります。そして更にその後にも、多くの者たちが直接イエス様の言葉を聞いて信じる者たちが起されたとあります。…ここに**信徒の群れ・教会が出来た**でしょう。サマリヤの女性もそこにいたに違いありません。そして嬉しい事に、**それまで彼女のことを排除していたであろう町の人々も一緒になって、霊とまこととをもって礼拝する交わりがそこに生まれた**ことでしょう。これが、イエス様の**福音の力**ですね。

イエス様が下さる「**生きた水**」は動いています。その流れは、今川越教会も流れている筈です。あの**十字架の赦し**の中で、神様は、私たちを一つにしてくれます。「この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。今がその時である」。

主が再び来られて真に救いを完成される日を待ち望みながら、**独りぼっちでなく、「共に」**神様を讃美し、悔い改め、捧げ、主を拝してまいりましょう！お互いに主に愛されている者として。

お祈りを致します。

